

はじめに 委員長よりメッセージ

地震国・日本の博物館は常にジレンマを抱えている。過去から引き継がれてきた貴重な文化的資産を守り、次の世代に遺したいと思いつつも、いつ来るか分からない地震に脅える姿は、暗闇の中で手探りをしている状況に等しい。今後30年の間に巨大地震の発生する確率は、「東海地震」「東南海地震」「南海地震」はそれぞれ87%、60%、50%と言われている。交通事故で死亡する確率は0.2%、癌で死亡する確率は6.8%と言われているから、地震発生の確率ははるかに高い。

地震、雷、火事、親父の順に恐れられている天災と人災は、防ごうとする心構えと備えとで対処していく以外に方法はない。昨年度に制作した「リスクマネジメントガイドブック 基礎編」に引き続き、本年度は「実践編」として地震と風水害対策を中心にまとめることにした。また、新しい試みとして動物園や水族館を意識して、このガイドブックをまとめたのもひとつの特徴であろう。心構えは本書を通して学び、お互いに啓発することによって意識となる。意識は備えの準備となり、備えは訓練によって確かなものとなる。

学芸員や博物館の職員は、文化財を守る専門家である。少なくとも一般市民から見れば、コレクションや文化遺産を守るプロとして映っているだろう。そのプロが怯えるだけでは心もとない。目に見えぬ敵を怖れることよりも、基礎編と実践編の両書を合わせて準備することが肝要である。抽象論や机上の空論では説得力に欠けるとの判断から、今回の実践編には他山の石となるよう多くの事例を取り上げた。自館の対策を練ってもらいたい。

被災したときは、隣人も被災しているし、他館も被災している。災害時には外部との連携協力が欠かせない……。そんなことは分かっている、と言わず、原点に立ち返って災害時ネットワークを考えておくべきであろう。一般的に言えば、行政はライフラインの確保に全力をあげるため、博物館資料は二の次、三の次になる。仮にそうだったとしても、地域の事情に応じて、次の一手はどうすべきなのかマニュアルを作って備えておくことである。その意味で、第Ⅵ部の「災害時ネットワーク」は読むだけでなく、自分たちで確立し、行動すべきである。

備えあれば憂いなし。本ガイドブックを十二分に活用して、各地域・各館において十分な対策を練っていただければ幸いである。

平成21年3月

「博物館における施設管理・リスクマネジメントに関する調査研究」検討委員会
委員長 水嶋英治